

看護学生の対人関係能力を引き出す 美德教育プログラム開発のための予備的研究

Preliminary Assessment of an Educational Course on Virtues for Nursing Students to Improve Their Human Interaction Skills

田中和子*, 浦山晶美*, 青木美紀*, 白石佳子*

Kazuko Tanaka, Akimi Urayama, Miki Aoki, Yoshiko Shiraiishi

キーワード：対人関係能力, 美德, ヒューマンケア, 自己受容, 他者受容

要旨

目的：本研究の目的は看護学生用に編集した Virtues Project（美德教育プログラム）のワークショップを実施し、その効果を検討することである。

対象と方法：A 大学看護学科の学生 5 名を対象とし、Virtues Project のワークショップを実施した。ワークショップ後に感想文を書いてもらい、質的帰納的に分析した。

結果：学生の感想文より 7 個のカテゴリーが抽出された。看護学生は【人との交流の喜び】で【自信がつき癒される時間の共有】ができ、【人間関係の中で美德の実践が役立つことの学び】があり、【自己と他者の受容】に繋がると感じた。またワークショップに参加することにより【美德の価値観の芽生え】、そして今後も【発展することへの期待】があった。

結論：VP のワークショップは、自己受容、他者受容においてポジティブな結果が得られ、今後、看護学生の対人関係能力の育成に効果が期待できる。

Abstract

Objective

The purpose of this study was to assess the effectiveness and future potential of the new Virtues based educational course for nursing students.

Subjects and methods

The researchers conducted a workshop for five nursing students of A University using the Virtues Project approach and materials. The participants wrote their impressions and the data from these impressions were analyzed using a qualitative and descriptive approach.

Results

Seven categories were extracted from this data. The nursing students enjoyed the human interactions during the course; they felt confident about themselves and the time they shared in companionship. The students learned that virtues and the related concepts were useful tools for enhancing attitudes that promote supportive and enabling human interactions, and that it helped them to more fully accept oneself and others. After the virtues workshop, the students' stated that their understanding of the value and role of virtues and their awareness of the virtues concept and its usefulness in improving their interaction skills had considerably expanded.

*山口県立大学看護栄養学部看護学科

Conclusion

The Virtues workshop created a clear-cut effect on participants self-acceptance along with acceptance of others. There is a high potential that the Virtues workshop can contribute positively to improving skills and attitudes among the Nursing Students and enrich their human interactions and hence worthy of serious consideration as a regular course into the nursing curriculum.

Key words

human interaction skills, virtue, attitudes human care, self-acceptance, other acceptance

I. 序論

看護師は対象者を身体的・精神的・社会的な側面から幅広く理解し、人間関係を形成する能力を身に付けることが必要である。Goodrich は、看護するという事は、「些細な行為にも意味を見出し、実践に際しては正確かつ最善を尽くしたいという気持ちを身につけることである。まず献身するという気持ちが大事で、広い視野、厳密な分析、化学の成果との密接な連携、きめ細かな認識、理解を産む忍耐力といったものも必要とされる」と述べている¹⁾。また、Henderson (1964)²⁾ は、「患者の必要としていることを知るためには、その心にまで触れる理解をしなければならない」と看護のあり方について述べている。

現在、看護師に求められる実践能力の一つとして、ヒューマンケアの基本的な能力の育成があげられている(厚生労働省)³⁾。看護におけるヒューマンケアとは、道徳的観念から観た場合に、ケアといわれるものであって、そこにおいては、人間的尊厳を守り、高め、維持することが目的とされている¹⁾。教育機関においては、その第一歩として、看護技術教授だけでなく、学生の豊かな人間性を培い、円滑な人間関係が形成できるような教育方法を見出すことが大切である。

そこで、人間の道徳的な資質の発達を促し、美德に基づいた人間関係を築くと考えられている「Virtues Project」(美德教育プログラム:VP)を看護学生用に編集し、ワークショップを実施し、その効果を検証した。

II. 方法

1. 研究対象者

A 大学看護学科の3年次生5名を研究対象とした。

2. 調査期間

2013年10月から約1か月間

3. 研究方法と内容

(1) VPのワークショップ実施概要

研究の説明と依頼は、口頭と依頼文書を用いて行い、VPのワークショップの参加の同意を得た。「Virtues Project」(美德教育プログラム:VP)を看護学生用に編集し、ワークショップを実施した。ワークショップは、VPの戦略の中からシェアリングサークルを実施した。シェアリングサークルは人間の資質といわれている美德の言葉を用いて、相手の長所を伝える、もしくは承認し、本来その人が持っている美德を引き出すというワークである。シェアリングサークルの時間は、約90分であった。対象者は2名でペアになり、各自52枚のVirtues(美德)cardから1枚を引いて、それをじっくり読む。このカードは、人間の資質を「52の美德の言葉」(表1参照)で表現している。1枚のカードには1つの美德について書かれ、その内容は「定義」「実践方法」「確言」である。次に参加者はカードに書かれた内容と自分の身近な出来事に関連付けて話す。ペアになっている2人は、受容、傾聴、共感の姿勢をもち、お互いの話を聞いたり、話したりすることができるような「場」になるように、境界線を引く。本研究で用いた美德による境界線は、尊敬、礼儀、信頼、自己主張で、これを説明する時には、お互い尊敬の気持ちを持って接すること、話した内容は口外しないこと、自分が話をする番では自己主張をすることを約束する。このように具体的にルールを設定し、それを守りながら、聞く姿勢、話す姿勢にもっていく。傾聴している1人は、ペアの相手のもつ長所(美德)を発見し、それを言葉で伝え、参加者のネームプレートにその言葉を書く、というプロセスである(浦山ら, 2014; 浦山, 2010)^{4) 5)}。なお、本研究のワークショップは、Virtues Projectが認定するファシリテーターの資格をもつ教員が実施した。

表1. 52のVirtues (美德)

| | | | | | | | |
|------|-----|------|---------|----|------|-----|------|
| 愛 | 識別 | 誠実 | 名誉 | 共感 | 親切 | 忠誠心 | ゆるし |
| いたわり | 自制心 | 辛抱強さ | 優しさ | 協力 | 信頼 | 慎み | 喜び |
| 思いやり | 自信 | 整理整頓 | やすらぎ | 勤勉 | 信頼性 | 手伝い | 理解 |
| 感謝 | 柔軟性 | 責任 | 目的意識 | 決意 | 正義 | 忍耐 | 理想主義 |
| 寛大 | 正直 | 節度 | 勇気 | 謙虚 | 清潔 | 奉仕 | 和 |
| 寛容 | 情熱 | 創造性 | 友好 | 優秀 | 自己主張 | 無執着 | 礼儀 |
| 気転 | 真摯 | 尊敬 | コミットメント | | | | |

(注) 価値観は文化によって変わるがこれらの言葉は特定の宗教やイデオロギーに偏っておらず、人間の資質の要素である (Linda Kavelin Popov が提唱した 52 の美德)

(2) 質問紙調査

ワークショップ実施者が、目的、内容、方法等を説明した後、同意の得られた学生に質問紙調査を実施した。質問紙は、無記名自記式質問紙法とした。ワークショップ前に自尊感情、特性的自己効力感に関する無記名自記筆の調査票を配布し、回収した。ワークショップ後は、上記に加え、参加して役に立ったことや、参加後の意見、全体的な感想文を学生に書いてもらい回収した。回収された調査票を分析対象とした。

4. 分析方法

(1) 感想文

ワークショップの感想文を対象者の体験が現実のものとして感じられるまでを精読した。対象者ごとに、美德に関連した記述を抽出し、個々の記述を本質的な意味内容を損なわないように要約し、コード化した。次に類似したコードを集め、サブカテゴリーを整理した。全対象者のサブカテゴリーを比較検討し、対象者のワークショップ後の自己の美德に対する気づきを抽象化した。分析結果は、母性看護学の研究者で話し合い、信頼性の確保に努めた。

(2) 自尊感情と特性的自己効力感

自尊感情は Rosenberg が開発した self-esteem 尺度の日本版を使用した。自己への尊重や価値を認める程度が高いと評価される。特性的自己効力感 Scherrer らが開発した尺度の日本語版で、全 23 項目で構成され、人格特性的な自己の認知傾向を測定するものである。

5. 倫理的配慮

研究対象者の学生には、同意説明文書に基づき、

研究目的や方法等を書面ならびに口頭で説明し、プライバシーの保護遵守、研究参加の自由意思と途中辞退の権利の保障、また学業成績には一切関係しないこと、匿名性の保証、研究で得られたデータは研究目的以外に使用しないことを説明し同意を得た。本研究は、2013年山口県立大学生命倫理委員会の承認を得た (審査承認番号 # 25-19)。

III. 結果

1. 研究対象者の概要

調査対象とした5名の看護学生の平均年齢は22.4歳±3.2歳、5名全員女性であった。

2. 分析結果

(1) 感想文

自由記載の感想文を分析した結果、7個のカテゴリーと25個のサブカテゴリーが見出された (表2参照)。カテゴリーは【 】,サブカテゴリーは〔 〕で示す。

カテゴリー①【人との交流の喜び】

学生は、普段の生活の中で、お互いに意識して仲間を褒めたり、褒められたりする機会が少ないため、美德の言葉で褒められることで、照れながらも〔自分を承認されることの喜び〕を感じていた。また、普段伝えられない自分の気持ちを他者に知ってもらいたいと思い、しっかりと感謝の気持ちを伝えていた。学生は、みんな〔参加して楽しかった〕と感じていた。

カテゴリー②【自信がつき癒される時間の享受】

学生は、今まで意識していなかった〔他者の長所の発見〕し、尊敬する大切さを実感していた。また

自分が美德の言葉で認めてもらうことで〔自信がつく〕ようになり、自分自身のよいところを発見し、〔自尊心があがる〕体験をしていた。学生は、素直に美德の言葉を口にするによって、心が穏やかになり〔気持ち楽になった〕と感じていた。

カテゴリー③【人間関係の中で美德の実践が役立つことの学び】

学生は、美德の言葉は、誰にとっても気持ちのよいものであり〔心の緊張をほぐす〕効果があり、〔コミュニケーションを円滑にする〕と感じていた。学生は、ワークショップを通じて、あらためて人は一人では生きられないことを実感し、〔美德の実践は相手がいることで効果が発揮できる〕ものであると認識していた。また、相手のいい面を発見することができ、他人を認める美德の言葉は〔愛する力を引き出す〕と感じていた。相手から認められることで、自分自身も愛すべき人間であると実感していた。〔自分を認めることによって自分も他者も愛することができる〕プログラムであると感じていた。常にポジティブな美德の実践は心の健康につながると考え、〔健康と美德の実践はつながりがあることの発見〕があった。

カテゴリー④【自己と他者の受容】

学生は、美德の言葉で他者を認めること、自分が認められることで、他者および自分自身の存在が素晴らしい存在であることが実感でき、〔自己の本質的な価値の気づき〕を体験していた。学生は、相手が自分を気にかけてくれている喜びを実感し、〔認めてもらえることから得られる自己の存在感〕を認識していた。自分のマイナス面も認め、自分を許す気持ちが芽生え、〔ありのままの自分を受け入れることができる〕ようになると感じていた。そして、相手を大切にしたいという思いが増し、〔自分が認められると他者も受容できる〕ことを実感していた。美德の言葉かけは、他人への思いやりの表現であり、また、人への寛容さの大切さを実感するものであり、〔相手を理解し受容することができる〕手段であると考えていた。

カテゴリー⑤【日常生活に美德を実践することの価値観の芽生え】

学生は言葉かけの大切さを改めて認識し、〔美德の言葉かけを大切にしたい〕と思うようになっていた。そして、相手に思いを伝えるときに美德の言葉を使いたいと感じ、〔美德を日常生活に取り入れ

たい〕と考えていた。〔プラス思考は状況を受容し生きやすくなる〕ものであり、学生は、美德の実践によってそれができると感じていた。学生は、美德の言葉で相手を承認したときに相手の考え方がポジティブに変化した体験や、見えないものの大切さに気づいた体験から、〔新たな価値感の気づき〕があった。

カテゴリー⑥【美德の実践が発展することへの期待】

美德の言葉は、傷つく人を減らしたり、困っている人や悩んでいる人の力を引き出せる力があると感じており、〔美德の可能性〕を見出していた。そして、学生全員が、人間関係を良好にする美德の言葉を、たくさんの人に知って欲しいと考え〔美德を広めたい〕と感じていた。

カテゴリー⑦【美德の実践は日常生活で意識されていないことの気づき】

学生は、美德の実践の大切さを実感していたが、美德の言葉を使って表現することは、初対面では難しいと述べており、今まで普段の生活の中で意識して使っておらず、〔美德の言葉は不慣れ〕なことや〔美德の使い方の難しさ〕が浮き彫りとなった。

(2) 自尊感情、特性的自己効力感の得点(表3)

ワークショップ実施前後の自尊感情、特性的自己効力感の得点を表3に示す。

ワークショップ後5名全員の自尊感情の上昇がみられた。また5名中4名の特性的自己効力感の上昇がみられた。

IV. 考察

1. 美德の言葉の効果について

近年、若者の生活体験の乏しさが問題となっており、看護学生も全体的に生活体験が乏しい現状がある。川田ら(2005)⁶⁾によると生活体験の乏しさは、生活技術の不足だけでなく、他者への関心や思いやりの欠如といった深刻な問題をもたらし、他者への思いやりが乏しく、コミュニケーション能力も低い学生が看護職を目指している現状があることが明らかになっている。VPのワークショップの目的は、道徳的な視点を取戻し、人間的な資質の発達を支援し、それに基づいた人間関係を築くことである。学生は日常生活の中で美德を意識した生活をしていない。しかし、VPのワークショップでは意識的に美德の言葉を口にするよう心掛け、美德を実践しようとしていた。美德の言葉かけで相手を承認し、また、

表 2. カテゴリー・サブカテゴリー一覧表

| カテゴリー | サブカテゴリー | 代表的なコード |
|--------------------------|-----------------------------|--|
| ①【人と人の交流の喜び】 | 自分を承認されることの喜び | もっと他者に自分の気持ちを知ってもらいたいと思った 気持ちを伝えることができた 美徳の言葉で感謝をしっかりと伝えることができた ほめてもらえてうれしかった 自分のプラス面を認めてもらって嬉しかった ほめてもらって照れてしまった |
| | 参加して楽しかった | とても楽しかった 参加して良かった (2) 嬉しかった (2) 美徳のWSが良かったです |
| ②【自信がつき癒される時間の享受】 | 他者の長所の発見 | 他者のいい面を発見した 他者を尊敬することができた |
| | 自信がつく | 自分に自信がつく (4) 周りから美徳の言葉で認められようと自信を持てるようになる |
| | 自尊心があがる | 自尊心が向上する 自分のいいところを発見し、自尊心を持つことができた 承認されると自尊心があがる |
| | 気持ちが楽になった | 幸せな気持ちになった 素直になれた (2) 気持ちが楽になった 心がおだやかになった 心が温かくなった 自分も気持ちが良くなった 美徳の言葉で心が癒された |
| ③【人間関係の中で美徳の実践が役立つことの学び】 | 心の緊張をほぐす | 美徳の言葉は周りの人をプラスにする 相手の心をほぐす 美徳の言葉はお互いが気持ちよくなる 相手も気持ちが良くなる 美徳の言葉は誰にとっても「良い」言葉 |
| | コミュニケーションを円滑にする | あまり関わりのない人ともコミュニケーションがとれるプログラム 美徳の言葉はコミュニケーションの壁をなくす 初対面でもコミュニケーションがとれるプログラム |
| | 美徳の実践は相手がいることで効果が発揮できる | 美徳は人間関係の中で発揮することができる 美徳の実践効果は相手があることで効果がある 人はひとりでは生きられないと思った |
| | 愛する力を引き出す | 美徳の実践は相手を思いやる気持ちだ 他人を認めることは愛することにつながる 美徳の言葉で相手を認めるともっと好きになる 相手のいい面を発見することにより好きになる美徳の言葉は愛する力を引き出す (2) 美徳の実践は愛する実践に効果がある 自分をもっと愛せる 美徳の言葉は愛したいという思いが増す 美徳の言葉は「愛する力を引き出す」と納得した |
| | 自分を認めることによって自分も他者も愛することができる | 自分を愛することができると他者も愛せると思う 相手から認められると自分をもう少し愛していきたいと思った 自分も他者も愛すべき人だと感じた |
| | 健康と美徳の実践はつながりがあることの発見 | 心の健康と美徳の実践はつながる 美徳は心の健康につながる 美徳の実践は心の健康に役立つ |
| ④【自己と他者の受容】 | 自己の本質的な価値の気づき | 自分の価値をあげることができた 他者の価値をあげることができた 美徳の言葉によって自分の存在価値を感じた 自分の価値に触れることができた 新たな自分を美徳の言葉で見つけた (2) 自分の価値が発 |

| | | |
|-------------------------------------|-----------------------|---|
| | | 見できた 自分は素晴らしい存在だと認識できた 改めて美德の言葉で認められると自分を実感しやすくなる |
| | 認めてもらえることから得られる自己の存在感 | 相手は自分を見てくれていると感じた 相手は自分を認めてくれていると感じた |
| | ありのままの自分を受け入れることができる | 自分のいい面が発見できた (2) 自分のだめなところも認める力が増した 自分が頑張っていると気づかせてくれる 自分を許せる気持ちが大きくなる 自分を大切にしたいという思いが増した 自分が気づかなかったプラス面がわかった 自分のマイナスもプラスも捉えることができた 自分を振り返ることができた |
| | 自分が認められると他者も受容できる | 自分が認められることで他人をも認めることができる 相手を大切にしたいという思いが増す |
| | 相手を理解し受容することができる | 相手を理解することができるプログラム 美德の言葉は相手を受け入れやすくする 人を寛容に受けとめてみようと思った 相手の良いところを美德の言葉で伝えることによってもっと受容しやすい |
| ⑤【日常生活に美德を実践することの価値感の芽生え】 | 美德の言葉かけを大切にしたい | 言葉かけを大切にしたい 相手を大切にしたいと思った |
| | 美德を日常生活に取り入れたい | 相手に思いを伝えるときに使いたい 美德の言葉を日常生活に取り入れたい |
| | プラス思考は状況を受容し生きやすくなる | 前向きに生きていくことができる 前向きに考えることができる プラス思考になる ポジティブなイメージと思った 状況をポジティブに受け入れられる |
| | 新たな価値感の気づき | 美德の言葉で承認することによって、見えないものに気付いた 承認されると自分も良い存在だと思えた 美德の言葉で相手の考えが少し変化した 新たな考え方で物事がみれた ものの見方をシフトすることができる |
| ⑥【美德の実践が発展することの期待】 | 美德の可能性 | 美德の言葉は傷つく人を減らす 勇気を持って決断・行動する効果がある 美德の言葉で励ますのは効果がある 悩みの相談に使えそう 美德の言葉はプラスの変化をおこさせるのに貢献できる 困っている人の力を引き出せる 悩んでいる人の力を引き出せる |
| | 美德を広めたい | たくさんの人に広めたい このような機会がたくさんあればよい このような機会がたくさんあればよい 他者から美德の言葉で自分を知ってもらいたい 美德の言葉を広めると人間関係がよくなる |
| ⑦【美德の実践は日常生活で意識されていないことの気づき】 | 美德の言葉は不慣れ | 美德の言葉は意識して使わない |
| | 美德の使い方の難しさ | 美德の言葉を使って話すのは難しい 初対面でのワークショップは難しそう |

表3. 学生の自尊感情と特性的自己効力感の変化

| ケース | 自尊感情 | | 特性的自己効力感 | |
|-----|------|----|----------|----|
| | 前 | 後 | 前 | 後 |
| A | 24 | 26 | 86 | 90 |
| B | 28 | 33 | 82 | 91 |
| C | 24 | 25 | 52 | 61 |
| D | 24 | 29 | 84 | 86 |
| E | 12 | 19 | 56 | 53 |

自分も承認されることで、穏やかで幸せな気持ちに

なり、相手への思いやりの気持ちを感じていた。現代の若者の対人関係の特徴は、自己中心적でお互いが傷つくことを恐れ、自己の保守的行動の強い傾向にある(酒井, 2010)⁷⁾。VPのワークショップでは、ポジティブな表現で自分が期待していることを明確に伝えるというルールがある。お互いに他人からしてもらいたいように他の人にもそのように接し、お互いの話をよく聞き、他人の話を遮ったり、忠告や

比較をしない。また、シェアした情報は、他に漏らさない。学生は、約束された安全な環境の中でお互いに心の緊張をほぐし、相手を尊重し、普段はお互いに言わないようなことも素直に口にでき、人との交流の喜びを改めて実感していたと考えられる。このような状況は、看護師が患者の心情を思いやり、敬意を払い、喜びを分かち合うということと似ている。Henderson (1964)²⁾は、「患者の必要としていることを知るためには、その心にまで触れる理解をしなければならない」という看護のあり方について述べている。学生は潜在的には、看護師としてこのような資質を持っているかもしれない。しかし、最近の若者は、他者への関心や愛着は希薄で、人間関係や人付き合いはお互いに深入りしない表面的なものになっており、やさしさや思いやりを表現することや人との関係をつくる場が減少してきている(尾原, 2006)⁸⁾。VPのワークショップに参加した学生の「美德の言葉を使って話すのは難しい」という感想からも、A大学の学生たちもまた、優しさや思いやりを表現することが減少している可能性がある。美德の言葉を意識的に表現するVPのワークショップは、患者を一個人として尊重し、受容的・共感的態度で接する看護師の基本的姿勢を育む訓練につながるのではないだろうか。

2. 自己の本質的な価値観の気づき

Abrahamら(2001)⁹⁾によると他者と自己の関係性は、その人の自己概念と密接に結びついている。人々の自己イメージと発展は、他者と自分自身の関係性に基づいており、さらにその関係性は、人々がどのように自分自身を観ているかによって形作られている。VPのワークショップ前と比較してワークショップ後では、5人全員の自尊感情の得点があがっていることや、「自分は素晴らしい存在だと認識できた」、「自分のだめなところも認める力が増した」、「人を寛容に受け止めようと思った」などという記述から自己受容と他者受容に関してポジティブな変化があったと考えられる。大森ら(2002)¹⁰⁾は、自己受容性が高い学生は、比較的良好な対人態関係を構築できる傾向があると報告している。また、梅津ら(2011)¹¹⁾は、「人は自他肯定の立場をとると温かみのある人間関係が構築できる」と述べている。Chardin(1967)¹²⁾は、「ヒューマンケアを行う際には、まず自分自身を大切にし、尊重すること、そうすれば相手のことを尊重し心から気遣えるように

なる」と述べており、対人関係を構築するには、自己受容が大切なポイントであるといえる。学生はワークショップ参加後に相手を大切にしたいという思いが増し、自分が認められると他者も受容できることを実感していた。さらに、学生は、美德の言葉は、他人への思いやりの表現であり、美德により人への寛容さの大切さを実感し、相手を理解し、受容することができると考えていた。責める言葉を使う代わりに、誰でももっている内在的な資質である美德で表現することで、責任感と自尊心が培われる。Abraham(2001)⁹⁾は、「人が承認を継続的に受けると、結果として、他者に対しての関係性のあり方に影響する。つまり、他者は自分について肯定的な感じ方をしていると思うようになり、自分自身についても肯定的に感じる傾向がある」と述べており、学生の記述はそれを表すものであった。

3. VPのアプローチを用いた看護学生への美德教育プログラムの効果について

看護学生の豊かな人間性を培い、円滑な人間関係が形成できるよう思いやりを育むための教育内容や教育方法は、個々の大学で自律訓練や心理学的アプローチなど様々な方法が取り入れられ、対人関係能力が育成されることが紹介されている。今回実施したVPのアプローチを用いたワークショップでも、自己受容、他者受容に関してポジティブな結果が得られ、また、学生たち全員が美德を広めたいと感じており、対人関係能力の育成に効果が期待できることが示唆された。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究は、A大学の看護学科の3年次生5名を対象に1回のVPのワークショップの実施によって得られた効果であり、対象者が増えたり、他の大学や違う学年だと結果が異なる可能性がある。今後、実施回数や人数を検討し、VPのワークショップの効果を検証する必要がある。対象を拡大し、量的研究と組み合わせて検討していきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力いただきました看護学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

1) Jean Watson / 稲岡文昭, 稲岡光子訳: ワト

- ソン看護論 人間科学とヒューマンケア, 17-48,
東京, 医学書院, 1992.
- 2) Henderson.V : The Nature of Nursing,
American Journal of Nursing, (64),62-68,1964.
 - 3) 厚生労働省 : <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.pdf> (アクセス 2014 年 12 月 10 日)
 - 4) 浦山晶美, 松井弘美 : 美德を引き出す方法を取り入れた両親学級の介入効果, 母性衛生, 55 (4), 742-750, 2015.
 - 5) 浦山晶美 : 心理的アプローチとして『美德・教育プログラムの方法』(Virtues Approach) を取り入れた「マタニティクラス」編成とその効果について, 母性衛生, 50 (4), 620-628, 2010.
 - 6) 川田智美, 木村由美子, 小暮深雪, 小林美恵子, 林元子, 狩野太郎 : 看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面, 群馬保健紀要, (26), 133-140, 2005.
 - 7) 酒井美子 : コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, (5), 103-114, 2010.
 - 8) 尾原喜美子 : 看護学生の関係づくり行動の変化作成した関係づくり行動尺度を使用して, 日本看護研究学会雑誌, 29 (5), 83-92, 2006.
 - 9) C.Abraham, E.Shanley / 細江達郎訳 : ナースのための臨床社会心理学, 142-143, 東京, 北大路書房, 2001.
 - 10) 大森和子, 千田好子 : 青年期にある看護学生の自己受容性と対人態度の関係性, 日本看護学会論文集 看護教育, (33), 189-191, 2002.
 - 11) 梅津靖江, 吉岡伸一 : 看護学生と看護職の思いやり行動と自我状態の比較, 米子医誌, (62), 91-102, 2011.
 - 12) De Chardin T : On Love, 7-8, New York, Harper & Row Pub,1967.

付記

本研究は平成 25 年度山口県立大学研究創作活動助成を受けて実施した。